

書き継ぎ、読み継ぐ近代日本のうた150年の歴史： 私家版・九大蔵書目録

嶋田，洋一郎
九州大学大学院比較社会文化研究院：名誉教授

<https://doi.org/10.48708/7324394>

出版情報：2024-11-26. Kyushu University
バージョン：
権利関係：



書き継ぎ、読み継ぐ近代日本のうた 150 年の歴史：私家版・九大蔵書目録

作成：嶋田洋一郎

「どの民族の歌謡も、その民族に固有の感情、衝動、物の見方についての最良の証人であり、その民族の思考および知覚方法の真の注釈、それも当の民族自身の喜ばしい口元からの注釈なのだ」（ヘルダー『人類歴史哲学考』第二部第 8 巻。訳文は、嶋田洋一郎訳、ヘルダー『人類歴史哲学考』（二）、岩波文庫、2023 年、200-201 頁）。

目次

< 解題 > 「近代日本のうた」と書物

- 1 本目録の目的
- 2 本目録の内容
- 3 本目録の意義
- 4 「日本のうた」を取り巻く環境の変化―書物のタイトルから見えてくるもの
- 5 期待される効果と今後の課題

< 書誌の部 >

< 1 > 著者別（生年順）文献リスト

< 2 > 年代順文献リスト：1901 年から 2024 年まで

< 3 > 主題別リスト

（1）詩集・歌詞集

（2）自伝・評伝

（3）職業別人名 1（司会者・アナウンサー・DJ・他）

（4）職業別人名 2（放送作家・プロデューサー・プロモーター・他）

（5）職業別人名 3（評論家・研究者・他）

（6）歌番組

（7）歌う場所

（8）美容・健康・ファッションなど

< 4 > その他の資料

（1）主要雑誌リスト

（2）1970-80 年代の特徴ある出版社リスト

（3）雑誌の特集記事

（4）「日本のうた」のタイトルなどが書籍のタイトルになっている書籍のリスト

< 5 > 索引

（1）人名索引（あいうえお順）

（2）書名索引（あいうえお順）

< 補遺 > 「日本の藝能 100 年」タイトルと著者『ミュージック・マガジン』1981.1~1994.5

< 解題 > 「近代日本のうた」と書物

< はじめに >

「歌謡曲」や「J—POP」などの「近現代の日本のうた」（以下、「日本のうた」と略称）は近年にあって映画・演劇・ファッション・マンガ・アニメなど他の文化ジャンルとともに日本のサブカルチャー研究の重要な分野となっており、いわば大衆文化研究の未開の宝庫である。本目録は明治期から現代に至る「日本のうた」に関する五千冊を超える書物を記載している。これに収録される個々の書物の書き手は、自分自身を「表現する存在」としての作（編）曲家・作（訳）詞家・歌手・演奏家・録音技術者といった「日本のうた」の作り手から、歌番組の制作者・司会者・アナウンサー・DJなど「日本のうた」の送り手を経て、「日本のうた」の視聴者にまで及ぶ。

本目録に記載される個々の書物の内容としては、特に戦後昭和期の「歌謡曲」を中心として、さらには童謡、唱歌、寮歌、応援歌、校歌、民謡そしてJ-POPあるいはヒップ・ホップにまで至るものであり、作り手から視聴者に至るそれぞれの著者の自伝・作品集・エッセイなど多岐にわたる。すなわち本目録は「日本のうた」に関わる多様な人々の生涯はもちろん、美容・健康・趣味にまで視点を拡大することによって、「日本のうた」の理解や解釈に多様な観点を提供するのみならず、それが明治以来の150年の日本社会の歴史の一側面を直接さまざまな人間の口から読み取ることの一助となることを意図している。

このように本目録の主要な目的は、書物名の記載にとどまることなく、そこから「日本のうた」を歌った人・作った人・書いた人はいったいどのような人なのだろうか？また、どのような人生を送ってきたのだろうか？この「日本のうた」はどのようにして世に出てきたのだろうか？また、どのような状況で歌われてきたのだろうか？ということを明らかにするための資料集となることにある。なお本目録は、あくまでも私家版であり、目録としての完成度を追求したものではない。記載漏れ、誤字・脱字・誤植等については御海容を願いたい。

1 「日本のうた」と書物

本目録が記載する書物の多くは歌い手も含めていわゆる芸能人によるものである。そこで当然ながら問題となるのは書物の信憑性、すなわち、この本は本当に本人が書いたものなのか、あるいはゴーストライターに書かせたものなのではないか？ということであろう。たしかにこの問題は純粋な文学書や哲学書、もしくは学術研究書であれば無視できないものであるが、芸能人による書物の場合はいささか事情が異なると思われる。そもそも芸能人が本を出版するということはいったいどのような意味を持つのか。そこにはまず当該の芸能人に対するファンを中心とした読者の期待があり、他方では知名度があるので売れるという出版社の思惑もあろう。

書物と読者のこのような関係についてはドイツの文芸学者ハンス・ローベルト・ヤウスが『挑発としての文学史』（1970年）において提起した「期待の地平」という見方が参考になる。すなわちそれは、著者は作品の執筆にどの程度まで関与しているのかというふうに著者と作品の関係を問題にするというよりも、読者が作品に何を期待するのか、あるいは作品が読者によってどのように受容されるのか、ということに力点を置くものである。このような読者による期待や受容といった視点は、芸能人に関わる書物において特に重視されることは容易に推測できる。

また、いわゆるタレント本や芸能人によるエッセイや自伝などは、一冊だけを取り上げれば、学術的価値はほとんどないかもしれないが、何十冊あるいは何百冊と集まれば、そこからはこれらの本が書かれた時代や文化の状況を読み取ることも可能であろう。それらは客観的な事実に基づく、いわば外からの歴史記述に対して、近年「心性史」あるいは「感情史」と呼ばれる歴史記述の方法に対応している。これは人々の思考様式や感覚といった日常的・内面的なものをさまざまな資料を用いて研究しようとする歴史認識の方法であり、日本ではすでに社会学者の見田宗介の『近代日本の心情の歴史』（1967年）において流行歌の歌詞分析が行われている。

今回の文献リストに収録されている自伝あるいは詩集などは、まさにこうした「心性史」あるいは「感情史」の資料として貴重なものであり、しかもこれほどまとまった数量を再び集めることはきわめて困難である。ちなみに本目録で言及される自伝などは、あくまでも「日本のうた」を歌ったり、作ったりした人の手によるものに限られており、それらはこれらすべての「日本のうた」の理解や解釈、さらには研究にも大きく役立つものと思われる。

2 本目録の内容と先行資料

将来的には、日本人であれ外国人であれ、たとえば1960年代から1980年代にかけての日本の文化を研究したいと考える人が出てきた場合、その場合の「日本の文化」とは具体的にいったいどのようなものが考えられるだろうか？「能」や「歌舞伎」や「文楽」は明治以前の伝統芸能であり、他方コンサートホールで演奏されるクラシック音楽はほとんど外国のものばかりで、ボブ・ディランにしてもビートルズにしても元来は日本の音楽ではない。とすれば、この時代の日本で流れていた日本の「日本のうた」は、映画やファッションやアニメなどとともに、近代日本の文化の重要な一部分を成すのではないだろうか？なお本目録では「日本のうた」の範囲を広く理解し、特に近代において発見された「民謡」についてもこれに含めている。

この分野での先行資料としては、音楽文献目録委員会刊行の『音楽文献目録』をはじめとして、音楽・芸能の分野に関する書籍目録などの基礎資料として日外アソシエーツが刊行している以下の事典類があり、これらはいずれも九州大学の図書館に収蔵されている。『芸能・タレント人名事典』（1990年）、『音楽家人名事典』（1991年）、『映画・音楽・芸能の本全情報 1945-94』（1997年）、『映画・音楽・芸能の本全情報 1995-99』（2000年）、『ポピュラー音

楽人名事典』(2000 年)、『映画・音楽・芸能の本全情報 2000-2004』(2005 年)。

そして当該分野において近年の最も傑出した仕事は三井徹による『ポピュラー音楽関係図書目録—流行歌、ジャズ、ロック、J ポップの百年』(日外アソシエーツ、2009 年)であろう。明治期から 2008 年(平成 20 年)までに国内で刊行された研究書、評伝、ガイドブックなど 6701 点を収録した同書は、軍歌、浪花節、歌謡曲、フォーク、ニューミュージック、ハワイアン、タンゴ、シャンソン、ラテン、カントリー、ラップ等のキーワード索引のほか、書名索引、著編者名索引を備え、さらには附録として「日本におけるポピュラー音楽に関する英文文献」を収録している。なかでも明治期の軍歌に関する記載には充実したものがある。

また第二次大戦後の日本の「日本のうた」は特に 1950 年代以降のアメリカのポップスに大きな影響を受けている。これについては 200 名を超えるポップス系のシンガーソングライターのバイオグラフィーを記したデイヴ・ディマルティノ著・松田洋子訳『ポップス、シンガーソングライター【ビルボード・ヒットメーカーズ】①②』(音楽之友社、1996 年)を参照されたい。1960 年代に入ると日本の「日本のうた」は特にボブ・ディランとビートルズの影響を大きく受けながら展開される。これについては膨大な文献が存在するので、本目録では部分的にしか記載されていない。

さらに 1970 年代になると洋楽のロックが日本でも流行する。なかでも NHK が 1971 年からテレビで放送を始めた「ヤング・ミュージック・ショー」は、音楽が耳のみならず目でも楽しめることを知らしめた点で大きな意味があった。この番組についての文献としては、城山隆『僕らの「ヤング・ミュージック・ショー」』が傑出している。600 頁を超える同書には、15 年間・80 回にわたって放映された全番組の記録が制作の背景や当時の世相も交えて詳細に叙述されているのみならず、各年の邦楽の状況やヒット曲についても記載されており、同時代の日本の「日本のうた」についての資料としても大変に価値の高いものと言える。

3 本目録の特徴

このように 2008 年(平成 20 年)以前の文献に関しては上記の諸目録で十分に把握されていると言ってよいであろう。したがって本目録の存在意義はまず 2009 年(平成 21 年)以降の文献を補う点にあるが、それだけでなく本目録は明治以来 150 年を超える「近代の日本のうた」に関する文献の特徴を明らかにしようとする点にも特徴がある。そして最も重要なことは、書誌あるいは書籍目録の作成にあたって作成者が現物を確認することである。なるほど近年はインターネットの普及によって簡単に情報を検索することが可能になっている。ただ本目録に収録された一般書や雑誌には、特定のテーマを中心とする学術専門書よりも幅の広い多様な内容が記載され、それらを実際に手に取って読むことで得られる収穫は非常に多い。

本目録に記載された六千点近いこれらの図書資料はすべて現物として九州大学の各図書館や研究室などにあり、そのうち約四千点は『近現代音楽文化コレクション』として登録されている。もちろんこの目録から漏れている書物もまだ多く存在すると思われる。しかし、

いずれにせよこのように多数の現物が存在するということは、個々の書物のタイトルからだけでは見えてこない記述内容（たとえば歌手の自伝や評論におけるディスコグラフィや年譜など）を実際にそれぞれの書物で確認することを可能にするのみならず、ここ福岡の地で近代日本の大衆文化を幅広く研究するうえで非常に有利な点であると言える。

ただ、これらの図書資料の多くは日本国内で最大の蔵書数を誇る国立国会図書館に収蔵されているばかりか、同館では紙媒体の図書のデジタル化作業も進められており、いずれはスマートフォン一つですべての図書資料が目に見える日もやって来ることを考えるならば、書籍の現物が存在することだけでは意味がない。また目録に関しても、種々のキーワードから検索が可能になっている今日では、書籍名や著者名を列挙しただけではほとんど意義がないことになろう。

3 本目録の意義

そこで次に問われねばならないのは本目録の意義である。冒頭のヘルダーの言葉が示すように、自分の口元から自然と出てくる歌について語る時、人はいつにもまして饒舌になる。こうした観点から重視されるのは、その人物が生まれたから亡くなるまで、あくまでもそれぞれの時代を生きた一人の人間として、どのように「日本のうた」と関わったのかということである。これは本目録に記載された 350 点を超える自伝や評伝の語るところであり、その背景には 150 年を超える「日本のうた」の歴史がある。2024 年に刊行された刑部芳則の『昭和歌謡史 古賀政男、東海林太郎から、美空ひばり、中森明菜まで』（2024 年）は、日本史研究の立場から昭和全体の歌謡史を、日本の近現代史として描いた力作であるが、本目録の意義は、この歌謡史を支えた個々の人間に着目する点にある。とりわけ個々の人物の生涯を語る自伝は、その人物が自分を取り巻く時代や環境の中で、どのように音楽と関わってきたかを知るうえでも貴重な資料である。人間と歴史のこうした関係についてドイツの文豪ゲーテは自伝『詩と真実 わが生涯より』第一部の冒頭で次のように述べている。

「私のうちなる衝動や、外から与えられた影響、あるいは理論的実践的に私の歩んできた段階を、順をおって述べようと努めているうちに、私は狭い私的な生活から広い世界へと連れだされ、近しい人、未知の人たるを問わず、私に影響をあたえた数多（あまた）の忘れがたい人たちの姿が、私の目の前に浮かんできた。さらには、私にも同時代の一般大衆にもきわめて大きな影響を及ぼした、一般的政治的な世界の移り変わりの巨大な歩みにとくに注意をむけなければならなかった。というのは、人間をその時代との関連のなかに置いて描きだし、時代全体の動きが、どの程度その人をそこなったか、あるいはどの程度その人に有利に働いたか、そこからその人がどのような世界観、人間観をつくりあげたか、あるいはまた、その人が芸術家、詩人、作家である場合には、その世界観、人間観を、こんどはどのような外にむかって映しだしたか、これを示すことが伝記の主要な任務であるように私には思えるからである」（訳文は『詩と真実』第一部、山崎章甫訳、岩波文庫、1997 年、15 頁）。

ここには伝記作家として、たんに自分ひとりの内面ではなく、自分を取り巻く外的な世界をも描こうとするゲーテの姿勢が表れている。これを本目録に記載された、1850年代から1990年代に生れた人物たちの自伝や評伝について見るならば、それは明治維新から日清・日露の両戦争、さらには二つの世界大戦にまたがる時代を「日本のうた」と関わって生きてきたそれぞれの人間のかけがえのない記録である。さらに「昭和歌謡」との関連では、その黄金時代を築いたプロデューサー・草野浩二や作曲家・村井邦彦などが、いわば「語り始めた当事者たち」として自伝を陸続と刊行していることも注目に値する。これらの多数の自伝や評伝を年代順に通読するだけでも、それぞれの人物の音楽に関わる生活から、百年以上にわたる「日本のうた」の多様な側面が見えてくるであろう。

4 「日本のうた」を取り巻く環境の変化―書物のタイトルから見えてくるもの

次に、明治から大正、そして昭和初期にかけて時代を追って見ることにしよう。当初は「民謡」「流行り唄」「唱歌」「小唄」「流行歌」など「日本のうた」に関する書物が多く見られるが、1930年代以降、レコード会社とそこに属する専属の歌手の登場に伴って、島田芳文編『レコード音楽技藝家銘鑑』（1940年）や霧島昇『歌ひ方指導』（1942年）といった書物が登場する。ここからはレコード会社の専属歌手が当時の人気職業の一つであったことが見てとれる。第二次大戦後もこうしたプロの歌手になることが人気の職業であったことは田村しげる『新人歌手入門』（1946年）や天地眞佐雄『歌謡曲これからの唄い方』（1951年）からも明らかであり、また藤井一市『NHK放送楽屋ばなし 附「のど自慢出演者のために」』（1951年）は＜NHKのど自慢＞という番組がプロ歌手への登竜門でもあったことを示している。

「日本のうた」をめぐる環境に大きな変化が生じるのは1960年代から80年代にかけてのことである。これには特に戦後のアメリカにおけるヒットソングが日本語のカヴァーという形で流行したことや、その後のビートルズやボブ・ディランなどの音楽も大きく影響している。国内における環境の変化についてはコロムビアやビクターといった戦前からの大きなレコード会社による歌手・作詞家・作曲家の専属制の解体など種々の原因が考えられるが、具体的な現象としてはフォークソングとアイドル歌手の台頭などが挙げられよう。

すなわちこれは、たとえば高名な作曲家の内弟子となってプロ歌手になるための専門的な教育を受けることが必ずしも必要とされなくなり、いわば誰でも歌手になれるということでもある。そしてこの時期に生まれたカラオケが「歌うこと」のいっそうの大衆化につながったことは森田公一『森田公一のカラオケ教本』（1978年）、平尾昌晃『平尾昌晃のカラオケ100点満点』（1983年）、堀野羽津子編『うたいやすい歌』（1985年）などからも読みとれよう。さらにダン池田『芸能界本日モ反省ノ色ナシ』（1985年）や淡谷のり子『ニセモノとホンモノ』（1986年）あるいはコロッケの『マネる技術』（2014年）からは、カラオケの普及と並行してプロとアマチュアの垣根も次第に低くなっていくことが見てとれる。

このような「オリジナルの不在」とも言える動きのきっかけとなった一つの大きな出来事は 1989 年の美空ひばりの死であろう。それ以後の「カヴァー」あるいは「歌い継ぎ」ブームはその結果の一つでもあり、1960 年代から 80 年代にかけての「歌謡曲」歌手が高齢化した今もなお当時のヒット曲を歌う状況は「日本のうた」の無時間化・非歴史化にほかならず、1960 年代から 80 年代の「歌謡曲」シーンの永劫回帰でもある。こうした状況は 150 年に及んだ「近代の日本のうた」あるいは「歌謡曲」の終焉と見なすこともできる。

これを「日本のうた」を提供する技術との関連で見ると、インターネットや YouTube などの発達による歌唱（画像）の同時多発化であり、番組などの先行配信・見逃し配信を通じての未来と過去の現在化と言うこともできよう。これは「年をとらない名曲」へのアクセスがいっそう容易になりつつあるということである。当今の「カヴァー」あるいは「歌い継ぎ」ブームも「オリジナルの不在」に起因すると思われるが、May J. 著『私のものじゃない、私の歌』（2016 年）は、歌手のアイデンティティーが必ずしも自分のオリジナル作品を持つことと結びついていない状況を示しているようで興味深い。さらに本目録を作成している 2024 年に至るここ数年において特に目立つ現象は、前述のように 1960 年代から 80 年代にかけて「昭和歌謡」を支えてきた人たちの自伝が多く出版されていることであろう。

5 本目録の期待される効果と今後の課題

六千点近い文献資料が九州大学という一つの大学に収蔵されている大きな理由には、1968 年に日本初の芸術系の単科大学として設立された九州芸術工科大学（現在の九州大学芸術工学部）の存在がある。芸術工学部図書館（大橋キャンパス）には本目録に記載された図書資料のほかにも音響設計に関する多くの文献が収蔵されており、さらには「ワールド・ミュージック・ライブラリー」（キングレコード）をはじめ多くの音源や楽譜、「石原裕次郎ゴールデン・トレジャー」全 93 点を含む多数の歌謡映画などの映像資料がある。また箱崎地区の総合研究博物館には「蓄音機・SP レコードコレクション」もある。

京都にあって当該分野の書物のみならず音源や映像も多く収蔵している国際日本文化研究センターを別にすれば、総合大学として九州大学ほど充実した資料を有する大学も珍しいと思われる。特に 4 万点を超える「SP レコードコレクション」の整理や分類には本目録にある『昭和流行歌総覧』を始めとして、雑誌「月刊 78・SP なつかしの歌」や森本敏克『SP レコードのアーティスト』が大いに役立つことが期待される。なお SP 音源については、九州大学中央図書館ホームページ上に「[芸工] 歴史的音源（れきおん）が聴けるようになりました」と題する 2024 年 11 月 05 日付 NEWS が掲示された。そこでは「デジタルで聴く明治・大正・昭和の音」として SP 音源に関する国立国会図書館による視聴サービスが芸術工学図書館で利用できるようになり、歌謡曲関係では 1929 年録音の「君恋し」（歌：佐藤千夜子）や 1931 年録音の「丘を越えて」（歌：藤山一郎）などが紹介されている。

今後の課題としては、九州大学の所有する種々の音源や、歌謡映画などの映像資料の書誌データを本目録と統合することであり、これらの資料を実際に活用することによって「日本

のうた」に関する多角的な研究が期待される。福岡県内の他の機関に目を向けると、北九州には映画関係の資料を多く収蔵する「松永文庫」が、また南の大川市には「古賀政男記念館」がある。

福岡以外の主な関連機関としては、京都には圧倒的な映像資料の数を誇る国際日本文化研究センターがあり、金沢ではポピュラー音楽研究の草分けであった音楽評論家・福田一郎が生涯をかけて蒐集した五万点を超えるレコードやCD、コンサート・プログラム、雑誌・書籍を内容とする「福田一郎コレクション」を有する金沢工業大学の「ポピュラー・ミュージック・コレクション」もよく知られている。また作家で歌謡曲にも深く関わった作家・五木寛之の作詞レコードを展示する「金沢五木寛之文庫」と、多数の貴重な蓄音機とSPレコードを有する「金沢蓄音機館」が存在する。そして東京の明治大学には作詞家・阿久悠の自筆原稿をはじめとするおよそ一万点の関係資料が収蔵された「阿久悠記念館」があるほか、武蔵野美術大学には音楽評論家・中村とうようが蒐集したレコードや楽器などの「中村とうようコレクション」が所蔵されている。なお当該分野における最も大きな研究団体としては、1990年に設立された「日本ポピュラー音楽学会」がある。関心のある向きは同学会のホームページを見られたい。

あらためて言うまでもないことであるが、本目録では記載の対象を書物のある人物に限定したため、「日本のうた」全体から見れば当然ながら遺漏があることを断っておきたい。また作成者が九州大学を定年退職した2021年3月以降の文献についての記載は極端に減少しているが、これについては読者諸氏が適宜それぞれの関心領域から補っていただければ幸いである。作成者としては、この目録の利用者が各自の興味や関心に応じて、さらに蒐集の幅を広げながら、自らの「マイ目録」を作成することを望みたい。さらに当該分野についての研究に関しては、たとえば「主題別リスト」などから、新たな研究の種が見つかることも期待できよう。

<書誌の部>

ここで簡単に目録の内容を示しておきたい。最初には、「翻訳唱歌」という形で近代日本のうたの基礎を作った一人である福岡県出身の国文学者・里見義（さとみ ただし）から始めて、「日本のうた」の新たな時代を作った初音ミクまでの個人の生年月と本人に関する書物を記載した「1 著者別文献リスト」を置く。これは著者と書物を年代順に詳細に記載するものであるが、著者の並べ方は「歌手」とか「作曲家」という肩書を付けず、一人ずつ産声を上げた順になっている。このことは本目録が「日本のうた」そのものの歴史だけでなく、「日本のうた」と関わった人たちの歴史を重視していることの証左でもある。これに「日本のうた」に関する書物を刊行年代順に記した「2 年代順文献リスト」が続く。

ここまでは人物と著作を中心としたものであるが、本目録ではさらに詩集、歌詞集、自伝など主題に応じた「3 主題別リスト」と「4 その他の資料」として「1970-80年代の特徴ある出版社リスト」などを加え、最後に「5 人名索引」「6 書名索引」を付している。

これらの中で「3 主題別リスト」は歌手・作曲家・作詞家といった職業に関わるものに加えて、美容・健康など人の生きざまに結びついているものを内容とする。また「4 その他の資料」にある「1970-80年代の特徴ある出版社別リスト」には、ペップ出版や八曜社など、当時の「日本のうた」に大きく関わった特徴ある出版社を記載している。以下、それぞれのリストについて作成方針などを詳しく説明しておきたい。

<1> 著者別（生年順）文献リスト

近代日本のうたの歴史を辿るうえで最も重要なリストである。人名（職業・生年月）、書名と注釈、刊行年月を記載している。ただし職業について、いわゆるシンガーソングライターのように作詞家・作曲家・歌手が一体化している場合など多種多様なので、基本的に自ら歌を歌う場合はすべて「歌手」としている。なお文庫で再刊されたものなど九大に未所蔵のものも多くある。このリストの最大の特徴は、それぞれの人物が、肩書や職業に関係なく、もっぱら生年月順に記載されていることである。それによって近代日本のうたに関わってきた人々が、どのような時代環境に置かれていたのかということが明らかになる。

年代としては「庭の千草」の訳詞で知られる前述の里見義の著書『雅俗文法便覧』が刊行された1877年から2024年までの約150年を中心とし、近代日本のうたに関わる人物を時間軸に沿って記載する。記載項目は名前（生年月）、著書名、刊行年月とする。150年という全体を通して見れば、何かこの分野での特徴が読み取れるかもしれない。なお書名で（ ）のあるものは本人による著書ではなく、本人に関する著書である。このリストからは、人物一人あたりの著書の数によって、本人による書物の場合には本人自身の「日本のうた」への関与の度合いが、また本人以外による書物の場合にはその人物への読者の関心の度合いが見て取れよう。さらにこれらすべての書物を見ると、その人物の「年譜」あるいは「ディスコグラフィ」が含まれているものも少なくなく、これらは研究資料としても不可欠なものである。

本目録に記載されている著作の中では小林信彦・片岡義男・美空ひばり・阿久悠・安井かずみ・なかにし礼・田家秀樹・松本隆・富岡一誠は自著・他著を含めて著書数が多く、同時にまた1960年代後半から80年代にかけての「日本のうた」を取り巻く状況を最も雄弁に語ってくれる人たちである。美空ひばりは歌手として幼少時にデビューして以来、最初期の自伝『虹の唄』から最晩年の『川の流れのように』に至るまで52年のその生涯全体が語られ、今なお語られ、歌われ続けている稀有の存在であり、自著と関連書籍を含めて百点近くに及ぶ書籍は戦後の日本社会それ自体の縮図でもある。

小林信彦は直接「日本のうた」について語ることは少ないものの、その背景にある当時の芸能やエンターテインメントの生き字引的存在である。小林と同年代の片岡義男はプレスリーとビートルズ受容の生き証人あるいは翻訳家として日本語という言語の創造にも関わっている。ジャズ評論で有名な平岡正明は名著『山口百恵は菩薩である』にも見られるように歌謡曲にも造詣が深い。阿久悠・安井かずみ・なかにし礼、松本隆はいずれも「昭和歌謡」

と呼ばれる 1960 年代後半から 80 年代にかけての「日本のうた」に豊饒な言葉を与えてくれた作詞家であると同時に「日本のうた」について語った著作も多い。なかでも安井かずみは新しい女性の生き方を実践した先駆的な存在である。また田家秀樹と富岡一誠は評論家としてフォークソングやニューミュージックといった団塊の世代の音楽を縦横に語って止むことがない。

研究者としては小泉文夫が第一に挙げられる。小泉は戦後の日本ではまだ低俗なものとしていた「歌謡曲」を、世界の音楽全般にわたる膨大な知識とフィールドワークに裏打ちされた高い識見によって音楽全体の中に位置づけた最大の功労者と言ってよい。特に 1970 年代後半から 80 年代にかけて行われた「歌謡曲」についてのシンポジウム〈今日の大衆と社会〉の一連の報告集（『歌は世につれ』、『歌・時代・日本人』、『技術の時代と歌文化』、『ヒット曲、ヒット歌手を作る』）は、同じシンポジウムの他の報告集（『音楽化社会』、『流行歌情念の化学』、『時代の気分 歌の気分』）とともに、歌謡曲研究の基礎文献とも言うべきものである。

また小泉文夫の蒐集した世界各地の民族音楽の貴重な音源資料も本学の芸術工学部の図書館に多く収蔵されている。その教え子たちの編んだ追悼論文集のタイトル『諸民族の音』は、ヘルダーの民謡集の改訂版『歌謡における諸民族の声』（1807 年）を想起させる。実際ヘルダーは主著『人類歴史哲学考』において次のように述べている。「音楽は、たとえそれがどれほど単純で未熟なものであれ、あらゆる人間の心に語りかけ、舞踊とならんで、地球上における自然の普遍的な歓喜の祝祭なのだ。ただ残念ながら、たいていの旅行家は、そのあまりにも繊細な感覚のせいもあってか、未知の諸民族のこうした子どもらしい響きをわれわれに伝えることを拒んでいる。これらの響きはたとえ音楽家にとっては役に立たなくても、人間性の研究者にとってはきわめて教示に富むものである。なぜなら一民族の音楽は、たとえそれが好き勝手な音のきわめて不完全な羅列であっても、その民族の内面の特質、すなわち彼らの感覚器官の持つ固有の調子を、外界の偶然事の冗長な記述が描き出しうるよりも、ずっと深く真実味をもって明らかにしてくれるからだ」（第二部第 8 巻。訳文は、嶋田洋一郎訳、ヘルダー『人類歴史哲学考』（二）、岩波文庫、2023 年、151 頁）。

< 2 > 年代順文献リスト：1901 年から 2024 年まで

年代順に文献を記載するという方法は『ポピュラー音楽関係図書目録—流行歌、ジャズ、ロック、J ポップの百年』と同じであるが、同書に未収録であった 2009 年以降の文献を記載している点と、書名、著者、発行所、発行年が表形式で記載されているので見やすさという点では一日の長があると思われる。また書名と発行年との関係からは、それぞれの年代でどのような音楽が受け入れられていたか、あるいはどのような問題が取り上げられる傾向にあったのかということが年代を追って歴史的にも明らかとなる。さらに 1970-80 年代のように特定の年代でしか見られない出版社もあり、その背景を探ることも重要である。また 2009 年以降の文献からは当該分野における近年の研究動向も読みとれる。なお書名の次に

（歌本）とあるのは、特に 1950 年代以降の芸能雑誌「平凡」や「明星」などの付録や、歌詞と楽譜などを掲載した書物のことである。また前述のように、作成者が 2021 年に九州大学を退官したこともあって、特に 2020 年頃から後の文献は収蔵数が減少している。ただ、当該分野における書物の刊行数は特に自伝類を中心として近年さらに増加していることもあり、書名から見て重要と思われるものを 50 点ほど「未収蔵図書」としてリストの最後に記載している。本目録をさらに充実させるためにも、これらの図書が何らかの形で収蔵されることが望まれる。

< 3 > 主題別リスト

このリストも従来の目録には見られなかったものである。ここでは以下の主題がそれぞれ表形式・年代順に示される。

- （１）詩集・歌詞集
- （２）自伝・評伝
- （３）職業別人名 1（司会者・アナウンサー・DJ・他）
- （４）職業別人名 2（放送作家・プロデューサー・プロモーター・他）
- （５）職業別人名 3（評論家・研究者・他）
- （６）歌番組
- （７）歌う場所
- （８）美容・健康・ファッションなど

（１）「詩集・歌詞集」では作詞（訳詞）家あるいはシンガーソングライターによる歌詞をそれぞれ一冊にまとめた詩集や歌詞集など約 80 点を、野口雨情から水野良樹に至るまで年代順に列挙している。ただし、ここでは単行本として出版された「作品集・詩集・訳詞集」に限定し、文学作品としての「詩集」のように曲を付されていないものも含まれる。ここに紡がれた膨大な数の言葉・歌詞は、メロディーなど音楽的要素と一体となっているものもあれば、言葉としてのみ書かれたものもある。これらは従来の純文学的な視点からは必ずしも「詩」として高く評価されてこなかった側面があるものの、全体として見れば、明治以来 150 年の日本語の変遷を探るうえでも重要な資料となろう。それはまた「日本のうた」の言葉を紡ぐ人たちのアイデンティティーが純文学的な「詩人」と、音楽を伴う「日本のうた」の詞を作る「作詞家」のあいだを流れ漂う過程でもある。この点において『詞人から詩人へ』という宮沢和史の著書のタイトルは興味深い。

（２）本目録で総点数が 300 点を超える「自伝・評伝」では、＜ 著作家の生涯は著作の最良の注釈である ＞（ヘルダー）と言われるように、本人の手になる自伝にあっては著者自身の心の中がそのまま吐露されている点で興味深いものであり、また第三者による評伝においては客観的な記述が中心となっている。近年において刊行数がとみに増加している自伝

や評伝は、近代の日本の「日本のうた」を作ってきた人たちの「音楽的自己形成」の記録であり、150 年以上におよぶ「日本のうた」の歴史をその内面から語ってくれる貴重な資料でもある。

特に声楽家・畑中良輔の全 4 冊に及ぶ自伝『繰り返せない旅だから』（『音楽少年誕生物語』『音楽青年誕生物語』『オペラ歌手誕生物語』『オペラ歌手奮闘物語』）は、1922 年生れの著者が駆け抜けたまさに動乱の時代における日本の「日本のうた」の状況が活写されており、この分野での必読文献といえよう。なお本目録では「著者」と「著者名」とが同一のものであるものを「自伝」とし、自伝的エッセイも含む。特に芸能人の「自伝」については「聞き書き」によるものが多いと思われる。ちなみにこれらの自伝類には、当該人物の年譜やディスコグラフィが記載されているものも少なくなく、資料的にも貴重なものである。

（3）～（5）「職業別人名」では近現代の「日本のうた」に関わった人物を取り上げる。まず（3）では作詞家、作編曲家、歌手など直接「日本のうた」に関わる人たちを取り上げる。続いて（4）ではプロデューサー、ディレクター、プロモーター、放送作家、実業家、アナウンサー、芸能リポーター、司会者、DJ、ナレーターなどラジオやテレビを通じて視聴者に「日本のうた」を届ける人たちや、写真やイラストなどによって歌手の姿を視覚的に伝える人たちにも目を向ける。そしてまた（5）では音楽評論家、音楽学者など書物を通じて「日本のうた」を紹介・研究・批評する人たちを扱う（生年など詳細は「著者別（生年順）文献リスト」を参照）。

（6）「歌番組」は「NHKのど自慢」、「紅白歌合戦」、「ザ・ベストテン」などテレビを中心とする歌番組のみならず、「オールナイトニッポン」や「パクインミュージック」など特に 1970 年前後からのラジオを通じた深夜放送番組にも目を向ける。また 1972 年から 1979 年にかけて放映されたテレビ番組「ぎんざNOW!」は、新人アイドル歌手のみならず、一般学生やバンド、さらには内外のミュージシャンなどが出演した点で、当時の若者文化を語るうえでも不可欠なものである。加藤義彦著『テレビ開放区 幻の『ぎんざ NOW!』伝説』には、年代別の主要出演者のリストと放送データが記載されている。

（7）「歌う場所」は「新宿コマ劇場」「日本武道館」など大きな劇場から、赤坂の「ニューラテンクォーター」のようなナイトクラブや、札幌の薄野（すすきの）のキャバレー、各地の小さな民謡酒場、そしてライブハウスに至るまで「日本のうた」が歌われ聴かれる場所が示される。これらを年代順に並べることによって、人々が時代の流れの中で「日本のうた」をめぐってどのように動いたのかということが明らかにされる。ここには記載されていないが、「スナック」や「喫茶店」も「歌う場所」として見逃せないものであり、これらについては九大図書館のホームページで検索可能である。

こうした視点に加えて（８）「美容・健康・ファッションなど」では『スリムになるってステキなことネ』（天地真理）や『おしゃれはほどほどでいい』（野宮真貴）のように、美容・健康・ダイエット・ファッション・ペット・手相・占い・趣味・料理などに関する書物が記載されている。「趣味本」として一括され、図書館にはなかなか収蔵されない。これらの書物は、人気タレントなどの名を借りて、広く人々の関心に訴えることを狙ったものであり、なかでも美容・健康・ダイエット・ファッションといったテーマは特に女性歌手がテレビやグラビア雑誌などにおいて視覚面からも注目されていた時代の記録でもある。

またこれらの主題は、歌手たちをそれぞれ一人の人間全体として理解するうえでも貴重な資料となっている。さらには『よう子の３分間ヨーガ』のように書物のタイトルからは想像できないが、そこには「逃避行」のヒットで知られる歌手・麻生よう子の音楽人生も綴られている。

< 4 > その他の資料

（１）主要雑誌リスト

本目録は図書資料に加えて多くの種類の雑誌を記載している。特に「シャンソン」「グラフィック NHK」「ミュージック・ライフ」「ニューミュージック・マガジン」「新譜ジャーナル」「よい子の歌謡曲」等の 1960 年代から 80 年代にかけて刊行されたものは全国の他の図書館にもほとんど収蔵されておらず、これらを当時の若者文化に関するまとまったコレクションとして記載している例はめったにない。たとえば雑誌「ミュージック・マガジン」の創刊号（1969/4）から 1970 年代（この時期のタイトルは「ニューミュージック・マガジン」）の分を所蔵している大学図書館は少ない。

「ミュージック・マガジン」で特筆すべきは、創刊者の中村とうようの主導のもと、朝倉喬司や細川周平など複数の著者によるシリーズ「日本の芸能 100 年」が連載されたことであろう（1981 年 1 月～1994 年 5 月）。150 回に及ぶこの連載は、幕末期から太平洋戦争の時代にかけての日本の大衆芸能を多様な視点から考察したものとして今もなお芸能史の記述という点においてその価値を失っていない（この連載の各記事のタイトルと著者については<補遺>を参照）。

1960 年代からは女性歌手の写真が芸能雑誌の表紙を飾ることが多くなる。こうした表紙集としては、集英社から刊行されていた芸能雑誌『明星』の表紙を集めた『「明星」50 年 601 枚の表紙』（2002 年）が必読（必見）である。その後こうした表紙は 1970 年代にかけて雑誌『Pocket パンチ Oh!』に引き継がれ、さらに雑誌『GORO』（小学館）は写真家・篠山紀信による表紙が飾ることになる。後者の二誌は、いずれも男性読者をターゲットとしたものであり、また前者に関わった写真家としては、中村正也、秋山庄太郎、大竹省二などがいる。篠山紀信については『スター 106 人：篠山紀信写真集』が収蔵されている。ビジュアル系の資料としては、人気スターや歌手の肖像写真である「プロマイド」の存在も見逃せない。

この時代のもう一つの特徴は、いわゆる団塊の世代を中心とするフォークソングなどの

新しい音楽の創作と、終戦から一段落したこともあって戦前の「懐かしのメロディー」を求める動きが並行して生まれてきていることであろう。特に後者については同人機関誌「月刊 78・SP なつかしの歌」の刊行も始まり、本目録ではその創刊号（1975 年）から数十冊を記載している。また 1969 年 6 月から福田俊二によって発行が開始された同人誌「なつメロ」（1969-85）も第 1 号から第 44 号までのうち 42 冊を記載している。さらに「世界音楽」あるいは「ワールドミュージック」の台頭を受けて刊行された雑誌「季刊ノイズ」も全 13 冊ある。これらの雑誌資料は 1960 年代から 80 年代にかけての日本におけるサブカルチャーの動きや傾向を知るうえでも不可欠の資料といえる。

（2）雑誌の特集記事

日本の「日本のうた」について各種の雑誌で特集された記事を年代順に記載している（九大到未収蔵のものもあり）。ここに記載された記事名を年代順に概観すると、各年代ごとの「日本のうた」をめぐる動きが見てとれよう。近年に関して言えば、美空ひばりの最晩年の 1988 年に雑誌 DIME では「歌謡曲 大暴落」という特集が組まれている。その背景には、1980 年代から 90 年代にかけて、いわゆる「歌謡曲」から「J-POP」へと流れが変わり、そこからさらに「シティ・ポップ」も存在権を主張する動きもあったように思われる。しかし最近になると「歌謡曲」はあらたに「昭和歌謡」という形で脚光を浴びている。なお雑誌一般に関する参考文献としては、宝泉薫『歌謡曲という快楽：雑誌「よい子の歌謡曲」とその時代』（彩流社、2002 年）や篠原章『ロック雑誌クロニクル』（太田出版、2005 年）などが挙げられる。

（3）1970-80 年代の特徴ある出版社リスト

同じくこのリストも従来の目録には見られない。このリストの意図は、ブロンズ社・サンリオ・アート音楽出版・ルック社・八曜社・ペップ出版・立風書房・レオ企画・旺文社文庫、ワニブックスなど 1970-80 年代の「日本のうた」の世界において特徴ある出版社の存在とそこから刊行される書物の特徴を明らかにする点にある。そこには当然また「日本のうた」をめぐる環境の大きな変化が存在する。すなわちそれは 1960 年代後半から 80 年代にかけてのフォークソングとアイドル歌手の登場であり、同時にこれは音楽だけでなく本によっても自己表現する音楽人たちという形で現れる。

さらにまたこうした現象は 1980 年代以降におけるスポーツのエンタテインメント化（プロレス・プロ野球）や漫才ブームとも関連している。本によっても自己表現するという点は、これらの分野でも同じであり、さらには『原辰徳—青春そして音楽』（1982）のような領域横断的な書物が見られるのも 1980 年代以降の特徴であろう。特にこの時期に「ワニブックス」として刊行されたプロレス・野球・漫才関係の書物が本目録に多く収録されているのもこうした理由による。このように 1970-80 年代の「日本のうた」を取り巻く環境は、若者文化のさまざまな領域と混淆し、いっそう多様化の道を辿る。

(4) 「日本のうた」のタイトルなどが書籍のタイトルになっている書籍のリスト

「日本のうた」が売れるとその「日本のうた」に関する本が出るという現象は多く見られるが、そのさい特徴的なのは、「日本のうた」のタイトルがそのまま書籍のタイトルにも使われていることである。逆にまたこのリストでは、書籍のタイトルが「日本のうた」のタイトルの「もじり」になっているものも記載されている。たとえば五木寛之と井上陽水の共著『青空ふたり旅』は井上陽水の名曲「青空ひとりきり」の「もじり」であると考えられる。さらにはウクレレ漫談家・牧伸二の著書『あー やんなっちゃった 泣き笑いウクレレ人生』のように、歌の文句あるいは印象的なフレーズがタイトルになっている書籍もリストアップされている。

< 5 > 索引

(1) 人名索引 (あいうえお順)

これは「1 著者別文献リスト一覧」に加えて、著書はないものの、近代日本のうたを語る場合に不可欠と思われる人物を時間軸に沿って記載したものである。ここではさらにこれらの人物が作詞・訳詞・作曲・歌唱などによって「日本のうた」に関わる場合、そのタイトルが一曲だけ人名の後に()で記されている。人名の後の()は生誕年を示す。『』は本人による、もしくは本人に関する書籍(1冊だけ挙げる)。書籍名に続く()には、その人物に関連する歌のタイトルを記す。

(2) 書名索引 (あいうえお順)

書名の後に本目録での記載頁を記す。なお、この書名索引は「キーワード索引」あるいは「事項索引」としても利用可能であり、歌謡曲、フォーク、ニューミュージック、ハワイアン、といった音楽のジャンルだけではなく、「紅白歌合戦」など音楽に関わる番組や「アナウンサー」や「DJ」といった職業などについても書名から読み取ることができる。

そしてもう一つ書籍のタイトルで興味深いのは、「千昌夫の～」のように歌手や作詞・作曲家の名前をタイトルの冒頭に付して、直接「日本のうた」とは関係のないテーマ、たとえばダイエットや料理から蓄財に至るまで多くの本が出版されていることであろう。便乗商売と言ってしまうまでもあるが、こうした書物の中にも「日本のうた」を歌う人たちの人間そのものが表れている。

なお本目録では「事項索引」を付していないが、たとえば「アイドル」「歌手」「オールナイトニッポン」などの個々の事項やキーワードを含む図書については、「書名索引」のみならず、九州大学中央図書館のホームページからも検索可能である。特に後者からは、本目録に記載されていない多くの書物が見出されることであろう。本目録の目的は、あくまでも近現代の「日本のうた」の全体像を、書物という側面から読み取る点にある。

＜最後に：昭和歌謡の歴史を記述するために＞

今回の目録に記載された書物のほとんどは、旧来の規範からすれば、図書館にはほとんど収蔵されないようなものも少なくなく、しかもそれらは一度失われてしまうと二度と手に入れることが困難となる。実際そこには、種々の事情で決して楽ではない人生を送ってきた人たちの手になる書物も少なくない。しかし近代の「日本のうた」の世界はこうした書物に描かれた多種多様な人々によって支えられてきたことも否定できない。一冊だけでは取るに足らないような書物でも、ここに「日本のうた」を中心として集まっていることを作成者として大変喜ばしく思っている。そしてこのように一体となった書物が照らし出すのは「日本のうた」のさまざまな側面であり、それは「日本のうた」の歴史を語るうえで大きな支えとなろう。

すでに当該分野において全四巻に及ぶ大著『近代日本の音楽百年 黒船から戦後まで』を著した細川周平は、このような視点に立つ音楽史記述を「庶民的立場の重視」として次のように述べている。「本書は省庁を核とする公文書よりも、些末そうな記事を寄せ集めて、聞き取りにくい人々の感受性、感想を拾い上げようと試みる。官よりも民、公よりも私、雅よりも俗の分野に焦点をあてた（ないしは偏った）音楽史を目論む」（『近代日本の音楽百年 黒船から終戦まで』第1巻「洋楽の衝撃」、岩波書店、2020年、25頁）。

本目録の冒頭に名を挙げたドイツの思想家ヘルダーは古代ローマの歴史を念頭に置いて、「偉大な事業が行われると、思想や著述も偉大なものとなる」（ヘルダー『人類歴史哲学考』第三部第14巻。訳文は、嶋田洋一郎訳、ヘルダー『人類歴史哲学考』（四）、岩波文庫、2024年、80頁）と記している。もちろん「日本のうた」の歴史を古代ローマの歴史と同列に論ずることはできないが、それでも戦後の昭和歌謡の歴史が、たとえば美空ひばりという不世出の歌手に代表されるとすれば、その生涯に沿って同時代の文化の動きも含めた歌謡史を描き出すことも意味のないことではないと思われる。その時には本目録も資料の寄せ集めでなくなり、歴史をさまざまに語る多様な声の合唱となるであろう。